

中野重治全集

第七卷

筑摩書房

中野重治全集第七卷

一九七七年二月十月初版第一刷発行

著 者 中 野 重 治

発 行 者 井 上 達 三

発 行 所

東京都千代田区神田小川町二ノ八
筑 摩 書 房

郵便番号 一〇一―九一

電話 〇三〇七六五一(代表)

振替 東京六―四一―二三

印刷 株式会社精興社
製本 株式会社鈴木製本所

装釘 杉折久美子

第七卷 目次

甲乙丙丁 上

一

後記

著者うしろ書 人間の無知のこと
解題

四九

五〇

甲
乙
丙
丁
上

「つまらぬことを商売にしたもんだな……」

津田は胡坐^{あぐら}のまま仰向け^{あおむ}に引つくり返つてそう思つた。今までに、十ぺんも百ぺんも思つたことのあるのと同じことだつた。

津田はそのままの恰好^{かっこう}でそれを声に出してみた。

「つまらぬことを商売にしたもんだな……」

それから今度は、それをのろのろと、一音ずつ区切つて、ローマ字文をよむときのようにして発言した。

「つ、ま、ら、ぬ、こ、と、を、し、や、う、ば、い、に、し、た、も、ん、だ、な……」

それは偶然的、いたずらまがいの思いつきだつた。ただ津田は、声に出してみ、今までの場合とはちがつた何かが、あるといつてはきつすぎるくらい^{くらい}の程度でそこにあつたようなを感じた。

今までは、十ぺんも百ぺんも同じことだつた。

「つまらぬことを商売にしたもんだな……」と思う。途端に「なにくそつ……」と思う。この浴びせかえすほうが強い。強かつた。それが、強いにも強くないにも、浴びせかえてこない。「つまらぬことを商売にしたもんだな……」という思いが、反撥^{はんはく}を呼び出さない。反動を引き出さなかつた。動が、ゆるめられて、静止で受けとめられたといつたそれは具合だつた。

「歳^{とし}のせいだろうか。そうでないことはない。しかしそれだけでもないな。商売にしたもんだなという思いが、

百べん目までのような新鮮さを失つてきたつてことだろうか。そうでないことはないが、それだけでもない……」

彼は起きあがつた。津田の商売がその机の上にあつた。

人の書いたものを読む。いくつも読んでそれを比べる。それが津田の仕事だつた。ある人がこれこれと書いた。別の人がこれこれと書いた。それは同じことか。ちがえばどの点か。またどの程度でか。第一のは、いつ書かれて、どこへ発表されたか。第二のはどうか。第二のは第一の影響を受けたものか。受けていなければ、受けていないのにどんなところから似た意見が出ることになつたのか。それはおもしろくもあつたが、つくづくいやになる仕事でもあつた。題目は津田自身で見つけてくることもある。部長からあたえられることもある。つまらぬのは、しらべにしらべた挙句、全く何の意味もないことが、それも確実にわかつてきたという場合だつた。骨折り甲斐があつたという場合とは、全然ちがつた疲労で津田はぶつたおれた。尨大な金額、何千何百何十何万何千何百何十何円といった金額を、それも小額紙幣で手で勘定する。そして帳簿の数字に合うか合わぬか確かめる。そんな仕事に津田の仕事は似ていたが、金勘定の場合は、相手が札束だけにまだしも助かるだろうと津田は想像した。

「どの百円札にも、個性なんてものはないからな……」

相手が人間な場合、おまけに学問的、藝術的書きものとなると津田には逃げ場がなかつた。札勘定なら、腹も立たぬほどへとへとなつても安酒でも飲めばすむ。安酒を酔うまで飲んで、人のいないようなところへ行つてひと声わめいてくればそれで寝てしまえるかも知れぬ。相手が人間で活字だとなると、秤にかけたりピンセットでつまんで置きかえてみたりした当の品物が、こつちへ影をおとしてくる。津田本人がそれに染められる。津田にはそれがひどく苦しかつた。

もう一つの場合もある。自分で見つけた題目にしろ、あたえられた題目にしろ、赤をさがそうとして行つて青

が見つかつてくることがある。赤がないことはないが、予想もしなかつた青が出てきて、結論としては軸が青に移動するようなことがある。軸が移動する、移動するべきだ、客観的に移動してしまつていると津田は考へて、しかし部長も部の会議もそれを認めない。青が出てきたのを認めた場合でも、軸の移動だけはいない認めない。軸はそのまま、析出された青の分はそつくりファイルにしまいこまれてしまう。それが津田にどつと疲れとなる。

「まるでスケジュール闘争じやないか……」

これについても、今それがあつたのではないが、百ぺん目までの即座の「なにくそつ……」が津田のなかで消えてしまつていた。反撥があるにはしても、抜く手も見せずといつた返討ちかえりうちの呼吸ではもう存在しない。その気のつき方が第一のろのろとしている。「はつと……」とか「ばつと……」とかでない。そのろろとした変化が、おとろえに無関係ではないにしても、津田としては、むしろ図太さへの変化のように受けとられる。

彼は頭をひと振りして机の上のものを見た。「ジャップ」という言葉をあつかつたものが二つ重ねてある。

「国連に行つてゐる日本の松平大使が、アメリカ全国むけのテレビ放送で、『ジャップ』について語つた。この言葉を、アメリカ人は『自由につかつていいだろう』と彼はいつた。その後それは松平のしくじりとして、はつきりした形でなしに取り消された。日本の新聞もその後は書いていない。

しかしアメリカでは問題はもうすこし深刻であるらしい。それは日本にいる日本人すべてにとつても同じことではなければならぬだろう。アメリカにいる日本人ないし日本系アメリカ市民は、日本の新聞が扱つた程度よりはずつと正式に問題を考へもし取りあつたつてもいる。

『全米市民協会』（これは日本系アメリカ市民の全国組織のひとつであるらしい。だれかが正式に教えてくれるとありがたい。）は、協会長ロイ・西川博士および総主事佐藤正雄の指図にもとづいて、ワシントン代表マイク・正岡を通して正式抗議を朝海あさかい日本大使に出している。

それはこういつている。

ウィンゲートに答えた松平の言葉は、ジャップという言葉を使うことを日本政府が公式に認めたのに等しい。『この国にいるわれわれにとつて、ジャップという言葉は、長い、そしてにがい歴史を持つている。それはこの国にはじめて移住した一世開拓者にたいして最初に用いられたもので、ヒステリーと偏見とをつくりだした連中によつて使われた侮蔑的毒舌であり、黄禍説をでつちあげ、一九二四年の排日法、西部十三州の外人土地法や地方的な差別法律をつくらせて、この国の日系人の生活、機会をおさえつけた連中によつてくりかえし使われた中傷的な呼び名であつた。』現に協会は、『この侮蔑的な言葉をアメリカから一掃するために』多くの努力をしてきた。それは実をむすんでもきた。その矢さきでの松平発言である。

そこで、『われわれは国際友好関係の立場から、また日本人の血をついだすべてのものの心に深くきざまれている反対をアメリカ人に明らかにするためにも、松平大使および日本の外務省は、米国の新聞、ラジオ、テレビジョン、またW A R D テレビ放送局のジョン・ウィンゲート氏にたいして、「ジャップ」という軽蔑の言葉に反対であることを公式に通告すべきである。』

この要求はみたされていない。日本政府は公式通告を出していない。

しかも『いわゆるジラードの事件』は、アメリカの西海岸地方であたらしく『ジャップ』を復活させつつあるとマサオカ氏は書いている。」

これは事件当時の一九五七年に書かれていた。筆者は津田自身だつた。津田はそれを『アカハタ』に投書したのでつた。これだけで全文だつた。

もう一つは小説家の前田河広一郎（まへだ かわひろいちろう）のものだつた。

「私は、いま、場合によつては、世界の知識階級聯盟に訴へて、公開的な堂々たる抗議文をも書き得べきほどの刺戟のはげしい、危険な一つの俗語のことを考へてゐる。この言葉は悪疫の伝染性を帯びてゐるやうに見えると

同時に、つきつめて考へると、帰結するところのない至つて散漫な一種の言語学上の無頼漢みたやうなものである。要するに、すべての俗語のやうに、言葉そのものには辛辣しんちやうな刺戟性を含んでゐるわけではないが、その用途、事情、時間、場所などによつて、私刑リシチにも、排斥にも、人種戦にも發展すべき危険性は充分にあるのだ。

——で、言葉は、単純な一シラブルの『ジャップ』といふ俗語である。

普通のアングロ・サクソンが、この言葉を話し、書き、私語する場合には、必ずしも完全に『ジャバニーズ』と綴る暇がないほど機械文明の時間制度に追はれてゐるものとは限らない。支那人を『チャイニーズ』と呼びずして『チンク』とちよん切る心理状態と同じく、彼等が我々を『ジャップ』と呼んでゐる固有名詞の辻斬りを行ふときには、無意識な習慣は別としても、決して日本人を愛好しての余りの親愛語的表現でないことは事実である。さう呼ばれたり書かれたり私語ささやかれたりした場合の我々が、鋭い侮辱に顔を赤らめると同時に、その発言者ないしは筆者には、漠然ながらも強い人種的な排他主義や優越感が動いてゐることは争はれない。しかも、この俗語の性質として、たとへば一本のむちを見るとすぐ我々の頭に馬といふ動物が現象するやうに、あらゆる抽象的な思索を捨て、すぐ現実の諸問題に我々を押しつけけないと承知せぬやうである。この妙にバタ臭い國際的冒瀆ぼうとく語の精神的または肉体的苦痛は、多数の英米人の間に、経済力も体力も、情人さへもなく、独りぼつちになつて、彼等の『国』だと思つてゐる地球の一部分に、食卓からこぼれるパン屑同然な食物を、働いてとつて食ふ、いはゆる『移民』でないと、わかりもしなければ、わかつてもほんとの実感ではあり得ない。日本で『あいつはヤソだ!』といったやうな侮蔑を投げあふのは少し趣を異にして、『ジャップ』といふ言葉は、その包括する範囲も極めて地理的で、生理的で、かつは心理的である。どんな意味から弁解しようと、サンフランシスコの『エキザミナー』紙や『サクラメント・ビュ』紙が『ジャップ』と一蔑語のうち日本人全般をそしり倒す場合に、それは単なる字引の上の略語ではあり得ない。若しハアーストに、『東洋の黄色惡魔』といふ、英語にすれば可なり長い綴りの言葉を、手短にいつてのける別な單語を鑄造するだけの頭があつたとしても、彼はきつと、

昔どほりにやはり『ジャップ』と我々を呼んで痛快がつた方が、いくら彼の愚劣千万な人種の優越感を満足させることかわからない。余計な心配ではあるが、頑愚彼の如きは、死刑に処される十秒前までも、恐らく日本人を『ジャバニーズ』などと発音する器量はあるまい。

で、自分として、いまは『ジャップ』といふ言葉の言語学的検討に必要以上の興味をもたうとしてゐるのではない。ただ、何がこの俗語の背後に暗示されてあるか、その具体的事実はどんなにつまらないものであるか、あるひはつまらなくはないものであるかについて、自ら感じたまを述べさせてもらはうと思つてゐるのである。

たしか雑誌『政治運動』の今月号だつたらうと思ふが、安部磯雄氏が、日米問題のことを短評して……」

前田河文はこのあとまだ倍以上も続いていて、そのへんから焦点が散つて行く気味はあつたが、とにかく書かれたのは一九二四年の大正十三年だつた。津田の投書のまる三十三年まえだから、津田が近ごろまで知らずにいたのも無理はないと津田自身考えている。

ただ津田はくらべてみて、津田のが論理的きんきん声を立てているのにたいして、前田河のが体験に立つてゐるようなのをいやおうなしに感じさせられた。

「この……精神的または肉体的苦痛は、多数の英米人の間に、経済力も体力も、情人さへもなく、独りぼつちになつて、彼等の『国』だと思つてゐる地球の一部分に、食卓からこぼれるパン屑同然な食物を、働いてとつて食ふ、いはゆる『移民』でないと、わかりもしなければ、わかつてほんとの実感ではあり得ない。」

それは動かせなかつた。どこへどんな関係で発表されたのか津田にはわかつていない。『種蒔く人』の覆刻版でもみたら見当がつくかも知れぬと思つてみても、津田たちがいくらいつても、その方面のものを社が買わない。買つてくれない。部長がまず承知しない。ただ津田は、これだけを写しておいた。評論集『十年間』というのからだつたが、あのころは、そういう風習がまだなかつたのか、発表場所が書いてなかつたと思う。だいいちその『十年間』が、このごろも探してみたが見つからなかつた。

津田は頬杖をついて、頬の肉が上へ押しあげられたため下まぶたが上へくつつきそうになるのをそのままにしてぼんやりとしていた。「ジャップ」のことで集めかけたものはある。それでも、ある言葉が書き手の体験に係があるかないかというようなことは題目のうちにはいつていない。むしろはいつてこない。それよりも、通勤がとめられたのだから、何かまとまつたものが出てきたところでそれをどうするか。どうしろというのか。とにかく部長のところへ出すのか。手当てを受けていることからすればそうするのが道だが、出せとも出すなどいわないで、しばらく出てくるなとはどういう仕打ちなのだろう……

両の眼がふさがれそうになつたまま、「ジャップ」に関係のないことが、大体のろのろとした調子で頭を通つて行く。

第一にトロツキーと芥川龍之介とのが通つて行く。それはこんなことだつた。大きなトロツキー評伝の翻訳が最近出て津田は読んだ。それはおもしろかつた。訳者がながい解説を書いている。そこへトロツキーとレーニンとの関係が出てきて、そこへ芥川が絡^{から}んでくるのだつたが、津田はあやふやなままそこでひつかかつた。ロマンチックなトロツキーにたいして、レーニンはあくまでリアリスチックだつた。そこで芥川龍之介が、そのあまりにリアリスチックな点、日本の政治家で尊氏や頼朝に似すぎているのに不満を感じていたのだと解説者が書いていて津田にひつかかつたのだつた。

「そんなこと、書いてたかな……」

しかし津田は、解説者の言葉を抜き書きしてはいない。芥川が何かそんなことを書いていたのは覚えていた。彼のロシア語訳短篇集が出て、それに序文だか跋文だかを書いたときに何だか頼朝の名を出していたかとも思う。しかし不満を書いていたはずはない。しかしそれをしらべてはいない。しらべなければならぬとも思わない。

第二に、そこへ重なるようにして、あとさきになりながら『くにのあゆみ』と「日本共産党の四十年」とが通つて行く。それにくつつくようにして、『初等科国史』も通つて行く。やはりほとんど眼をつぶつたまま、「あの

へんからだつたかも知れぬ……」とやはりのろのろと思う。

それはこんなことだつた。戦争のすんだ翌年になつて、文部省が『くにのあゆみ』という日本史教科書を出した。それはそれまでの教科書とはがらりと変つていた。「とよはら豊葦原の千五百秋あきの瑞穂みずほの国は……」という「神勅」なんかは、全部削られて、神話と歴史とを切りはなすような形で書かれている。実際それは、民主的な立場の学者たちがいろいろ手をかして出来たものらしい話も津田たちの耳にはいつていた。そして社で教科書総まくりといった資料を出すことになつたとき、津田にその『くにのあゆみ』が割りあてられたのだつた。

そのとき津田がおかしなことに気づくことになつた。それは、ある点でだけではあつたが、軍国主義的な『初等科国史』のほうが、民主的な『くにのあゆみ』よりもヨリ科学的に見えるといつたおかしなことだつた。津田は、方法とか方法論とかいうことには通じない。彼はただ抜き書を並べて部会で報告した。

「昭和の御代が隆々と明けてゆく時、海外の諸国は、世界平和を望むわが国の誠意を無視して、勝手なふるまひを続けてゐました。イギリスは、ひそかにシンガポールの武備を固め、アメリカ合衆国は、たくみに支那をあやつり、ソビエト聯邦は、軍備の拡張に日も足らぬ有様です。中華民国もまた、このころ、国内がひとまづじづまるとともに、いよいよ、排日の氣勢を高めて来ました。しかも米・英は、更にわが国をおさへようとして、またまた、軍備縮小の相談をもちかけ、昭和五年、英国の発起したロンドン会議では、わが公正な意見をかへりみず、補助艦の比率七割を、わが国におしつけました。」

支那は、じつところへてゐるわが国の態度を、臆病と見て取つたのか、ますます排日の氣勢をあふり、はては、わが居留民に危害を加へ、満洲におけるわが權益をさへおびやかす挙に出ました。すなはち、昭和六年九月、支那軍は、不法にも、南満洲鉄道を爆破しました。東洋の平和を望み、隣国のよしみを思へばこそ、たへしのんで来たわが国は事ここに至つて、決然としてたちあがりました。」

『初等科国史』でこうあるところが、『くにのあゆみ』ではこう書いてあつた。

「歐洲大戰がすんでから、しばらく平和がつづいてゐましたが、このころから、わが国内のありさまが、だんだん変つて来ました。ことに軍部の力が政治や經濟の上にまではびこつてきて、世間がさわがしくなり、五・一五事件や二・二六事件のやうな血なまぐさいことがつづきました。そしてたうとう滿洲のことから、中華民國との間にめんどやうなものができて、東洋の平和がみだれることになりました。

昭和六年（西曆一九三一年）九月、滿洲の奉天の近くで、南滿洲鐵道が、ふいに、ばくはされました。それきつかけに、滿洲にゐたわが軍が、奉天を攻めてこれを占領し、つづいて各地を攻撃しました。これが滿洲事變のおこりであります。」

つまり前者では、「滿洲事變」の原因として中華民國側の不法、横暴、鐵道爆破があげられている。『くにのあゆみ』では、かにもく原因というものがない。「ふいに、ばくはされました。」——それは何かを隠している。原因をかくしておいて歴史が書かれるだろうか。

津田の報告は、だいたい妥当なものとして認められた。しかし発表された資料では、そこは削られていた。一つには、教科書編纂委員会で保守派と進歩派とが対峙して、中華民國側が爆破したと書くのを引つこめるかわり、日本国側が爆破したと書くのも引つこめる、ということで折合いがつけられたとわかつたからだということだつた。

「おれの知つたこつちやないぞ……」

津田はそう思つてそのことも言つておいた。そしてそれは部内の問題として処置された。社として外へ出す問題でないというのに、それ以上津田は文句はつけなかつた。

問題が一変したのは一九六二年になつてからだつた。『前衛』に「日本共産党の四十年」が発表されたとき、津田は一読して「ある不幸」といつたものを感じた。「ある不幸」というのは、津田の場合、彼ら津田たちの不幸ということでもあるにちがひなかつた。

社の研究会があつたとき津田はそれにふれた。津田は細胞研究会でもそれにふれた。細胞研究会ではかなりきつくそれをいつたと覚えていた。

「アチソン声明がだされ、弾圧がつよまる情勢のなかで、それまで共産党をふくむ統一戦線を支持してきた社会党左派の指導者たちは、反共声明を発表しました。これは、その後の人民のたたかいの発展に一定の困難をもたしました。」

「この『一定の』が曲者だて……」と津田は思つた。猫も杓子も「一定の……」を使う。一定の意義、一定の困難、一定の成功。外国語にはなんと翻訳するんだろう。英語で *certain* とでもいうところだろうか。しかしそんなことで四の五のいうものは多くなかつた。

「だからつまり『一定の』じゃないか……」

そしてそんな調子と結びついて津田の出した問題が出ていたのだつた。

「……またわが党中央委員会は、内部にあつたアメリカ帝国主義にたいする不明確な態度を克服し、アメリカ帝国主義にたいする、民族独立の闘争をつよめる方針を明確化し、一九五〇年三月には民主民族戦線の共同綱領を發表し、民族独立、全面講和、平和のための民族的全人民的な闘争の展開をよびかけました。そしてこの重要な闘争で、中央委員会をはじめ全党が一致団結してその先頭に立つことを強調しました。」

そこにこうあつて、それがそのままこう続いていた。

「このような情勢のなかで、マッカーサーは党中央委員会の活動を禁止し、アカハタの発行停止を命じ、またわが党の国会議員をつぎつぎと国会から追放するなど、わが党にたいし大規模な弾圧をおこないました。こうして、アメリカ帝国主義は、わが国を前進基地として朝鮮への侵略戦争をはじめました。このような情勢のもとで、中央委員会内に不団結が生まれ、それまで党内に存在していたいろいろな弱点、欠陥とむすびついて、ついに事実上の党の分裂という不幸な状態をうみました。」

いつたい、「アメリカ帝国主義にたいする不明確な態度」というのはどう不明確だったというのだろうか。それ自身「不明確な態度」でないだろうか。

それを「克服」して、「方針を明確化し」、「中央委員会をはじめ全党が一致団結してその先頭に立つことを強調しました」その時点で、「このような情勢のもとで、中央委員会内に不団結がうまれ」というのは、「フダンケツ」という発言は別として、何が原因だったというのだろうか。

「中央委員会内に不団結がうまれ……」

「南満洲鉄道が、ふいに、ばくはされました……」

それは確かに或る状態を説明してはいた。しかしそれは歴史叙述ではなかった。なんでそんなことが、共産党の書いたものに出ることになったろうか。

「六全協決議」というのにはわかりかねるところがいくつもあつた。しかし決議の政治性格はつきりしていた。そのコースの上で、不明なところは次第に明らかにして行けばいい。あれから七年して、原因説明を抜きにして、状態説明だけで歴史を書こうと誰かがするのだろうか。

資料扱いの部門だけに、部の研究会でも細胞研究会でもここは突つこんで議論された。そして議論のすえに出たいくつかの結論めいたものももう一度ファイルにしまいこまれたのだつた。そして挙句の果てが「おととい昨日の処分

の通知だつた。

「あのへんあたりからだつたな……」という思いがやほりのろのろと津田の頭を通る。

津田は伸びをして、首のつけ根を思いきり十ばかりたたいてから台所へ声をかけた。

「山根さん、きょうの『アカハタ』、かしてくれえ……」

『アカハタ』、もう来ません。」というぼそぼそとした山根の声がきこえた。